

令和 7 年度田園自然再生活動の集い 開催要領

- 日 時 : 令和 7 年 12 月 11 日 (木) 12:30～16:30
- 場 所 : 東京国際フォーラム ホール D5 (対面・WEB 配信併用)
- 主 催 : (一社) 地域環境資源センター、田園自然再生活動協議会
- 後援 (予定): 農林水産省、環境省、全国農村振興技術連盟、(公社) 農業農村工学会、農村計画学会、棚田学会、(一財) 日本グラウンドワーク協会
- 参加対象 : 農家、行政、土地改良関連団体、地域活動組織、NPO、学生、民間等
- 定 員 : 会場 (100 名)、Web (300 名)
- テ ー マ : 田園自然再生活動の集い ～「千」の「地」の「知」～
(数多の土地の農に関わる継承知)
- 主 旨 :

「富士山に“農鳥”(鳥の形をした残雪)が現れたら田植えの準備をする」「サクラが咲いたらタネをまく」といった言い伝えに見られるように、日本では四季の自然の変化を手がかりに農作業の時期を判断し、自然のなかでの農の営みを通じて多くの工夫や知恵を蓄えてきました。

こうした自然観察に基づく知識は「自然暦」として、また農の営みから蓄積された農作業の工夫や知恵は「経験知」や「暗黙知」として、全国各地で多様な形で受け継がれてきました。これらは総じて「農に関わる伝承知」と呼ばれ、地域の暮らしや文化の中で重要な役割を果たしてきました。

しかし、農業や生活の近代化が進む中で、自然環境に左右されにくい画一的な農法が広がり、人々の自然への関心も次第に薄れつつあります。その結果、こうした伝承知も徐々に失われ、私たちの暮らしとは切り離されてしまっている状況もあります。

一方で、近年の田園自然への関心の高まり、農産物の付加価値や品質向上、気候変動への対応さらには先端技術を活用した後継者の育成や農作業の効率化、生産性の向上といった新たなニーズが生まれています。こうした背景のもと、自然のなかでの健全な暮らしや営みの在り方を見つめ直すことへの気運高まりを受け、「農に関わる伝承知」を再評価しようとする動きが見られます。こうした動きは、農業生態系の保全・再生を足掛かりとして、多様な主体が一体となり農業・農村の活性化を目指す「田園自然再生活動」においても、重要な示唆を与えるものと期待されています。

そこで、今年度の「田園自然再生活動の集い」では、全国各地に伝えられてきた農の知恵に着目し、その価値や田園自然再生との親和性について学びます。そして、これからの持続可能な農業や地域づくりの実現に向けたヒントを探っていきたいと考えます。

● 実施内容：シンポジウム「令和7年度田園自然再生活動の集い」

<プログラム（案）>

- 1 主催者挨拶 JT 生命誌研究館 名誉館長／田園自然再生活動協議会 会長
中村桂子
- 2 来賓挨拶 農林水産省、環境省
- 3 基調講演 静岡県立農林環境専門職大学 客員教授 中山正典 氏
題目：「農と水の民俗（仮）」
- 4 活動発表
 - ・川谷もよりの将来をみんなで考える会（新潟県上越市） 三輪芳和 氏
 - ・NPO 法人古瀬の自然と文化を守る会（茨城県つくばみらい市）小菅新一 氏
 - 葛飾区郷土と天文の博物館（東京都葛飾区） 小峰園子 氏
 - ・聞き書き甲子園（山形県庄内町）山形県立米沢女子短期大学 稲見 華 氏
- 5 基調講演及び活動発表に対するコメント（中村桂子）
- 6 パネルディスカッション
コーディネーター 総合地球環境学研究所 特任教授（プログラムディレクター）
荘林幹太郎 氏
コメンテーター 静岡県立農林環境専門職大学 客員教授 中山正典 氏
（一社）地域環境資源センター 理事長 林田直樹
パネリスト・活動発表者（4名）
- 7 情報交換会（希望者のみ）17:00～19:00

● 問合せ事務局：

（一社）地域環境資源センター 田園自然再生活動事務局

住 所：〒105-0004 東京都港区新橋5-34-4 農業土木会館6階

電話番号：03-5425-2461 / FAX 番号：03-3432-0743

メールアドレス：denen-saisei@jarus.or.jp

URL：<https://www.jarus.or.jp/>

担当：農村環境部 齋藤、藤田